

「米寿の祝」

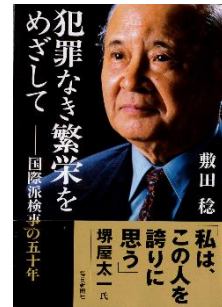
敷 田 英 子

米寿に想う

2020年10月31日、土曜日の午後、娘二人、その娘達とその家族、それに祝ってもらおう当人の私が鎌倉の海辺のホテルに集合しました。

10月末というのに暑いぐらいの日射しに穏やかに輝く波……。私には嬉しさの中に悔しさもありました。「これが稔さんの米寿祝であったら」と思わずにいられませんでしたから。彼の姿は写真の中だけです。

敷田の「犯罪なき繁栄をめざして」の末尾に米寿の年を古希とし、その時まで現役で、と記し、本気で願っていたのですから。この題は彼の目標であり、それに向かって突進した日々の重なりが生涯でありました。そんな敷田稔を「誇りに思う」と後押ししてくださった堺屋太一様に改めて心からの感謝を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。



この会は勿論、稔の写真が見守る中、朗らかに楽しく終わり、翌日は江ノ島近くの自宅に移って、佛壇のおじいちゃんに改めてそれぞれが挨拶して、ひとしきり、おじいちゃんを偲びました。そこに、1年前に家族に加わった男児（2番目の曾孫）とそのパパが加わり、一層賑やかに忙しくなりました。私にとって和やかな家族は稔からの大切な最高の贈り物です。感謝と幸せと沢山の花で溢れる2日間でした。

我家のホームパーティ（日本）

さて、ここからは、例の本の中から、「我家のホームパーティ」という章に私の記憶などから補足してみようと存じます。

まず、四番町住宅時代ですが、我ながら「よくやった」と思います。公務員住宅に内外人を20～30人もの客寄せ。娘二人は勿論、同じ官舎の安保、河上両夫人には水の供給を始め、いろいろ助けて頂きました。主婦経験の浅い私が本を片手に用意した目新しい料理には、びっくりなさった方も多かったかもしれません。インドの方に、「カレーも、おいしいけれど少しマイルドですね」と言われたことがありました。それで、辛くする為に唐辛子をつぶして、その破片か何かが眼に跳び、思わずギャッと叫んだ私を、稔は「目を洗え！」と洗面所へ引っぱって行き、蛇口を上にごいとまげて、吹き上がる水流に顔を押しつけて目を洗ってくれました。少し落ちついて眼をあけてみたら、中学生の娘は「家庭医学」を持ち出して眼の手当てを探してくれて

いる最中でした。

彼の「本」の中でいろいろ書かれています、こんな小さな事の積み重ねが今の家族につながって、眞物になったのでしょう。そう言えば四番町住宅もここと同じ西向きで富士山が眞正面に見え、夏の西日が焼けつくように暑かったのも思い出されます。

京都地検、広島高検、名古屋高検官舎では、奥様方のご協力もあって、地元名物も登場し和やかでした。今でもご連絡頂くこともあり、ありがたく思っております。

この藤沢に移ってすぐ、敷田は東京にいることが多くなりましたが、地元の有志の方々が「ふじのね会」を立ち上げてくださり、何かにつけ集まって楽しい宴がありました。7月の花火の夕は神谷先生（元検事総長）はじめ、多数の方々が集い、ビールを片手に喚声を上げて、これも賑やか、かつ忙しい「花火がご馳走」のパーティでした。

我家のホームパーティ（海外）

ウィーンでのパーティは彼もいろいろ記しておりますが、毎回、来客の顔ぶれ、お招きの理由によって準備が異なり大変でした。が、楽しくもありました。それは稔が



ウィーン ナッシュマルクト（マーケット）

積極的に計画・準備に加わってくれ、コミッサリーや街のマルクトで一緒に買い物、意見を交わして協同作業という実感があつたからでしょう。何日も準備にかかる時も、急な来客もありましたが、今ふり返ると、皆、なつかしい思い出です。料理もさることながら、いろいろな面で日本人のお友達の助けは本当に有難く、「日本人」として国連の中でも堂々として行動できました。

その後、キューバ कांग्रेसの折りには、三井物産の河上氏の手配で現地で日本の電気釜をお借りして、「ごはん」を炊き、日本からの同行参加の方々に喜んで頂けたことも、ありがたいご縁でした。

招かれるのも勿論しばしばで、ベテーレ家のイタリアン（特に巨大なパプリカの直火焼は江ノ島花火パーティーに度々登場）、ダビッド家のアルゼンチン流の偉大なローストビーフ塊、リビア出身のモハメド一家の心のこもった手料理などと、各国流のおもてなしは珍しく楽しく、皆さんの表情や笑い声など、得がたい経験でした。レド家にも度々招かれ、後ではウィーンに行く度に宿にさせて頂き、成長していく庭も美しく、楽しい思い出が一杯です。

ウィーンでは日本人会もありましたが、そういう広い会には敷田は日本での検察官という職を意識してでしょう、欠席することが多かったと記憶しています。ですから小グループの親しい方々とは、おいしい日本食とマージャン等を心から楽しんで感謝しておりました。ある夜、ふと気がついて外を見ると車は白いマントを着、道はふっくらと白く盛り上がっていて大さわぎ。深夜の雪かきの後帰宅という事件もありました。我家は日本人が多く住む地区とリンク反対側の坂の上に立つ古い館でしたから、雪に不馴れ、かつマージャン後の稔の運転で、無事に帰宅した時の安堵感も忘れられません。



ウィーン自宅にて



ウィーン自宅にて

さて、その我家でのパーティでは、準備だけでなく、終わってからの大変さの一つは挨拶でした。皆様上機嫌で、「アリガトウ、ヒデコ」からハイディコ、イデコ、マダム、ヒデコサーンとそれぞれの言葉とハグと握手をしっかりとされるので(体格のよい方が多い!)翌日は右手の痛さをこらえながら後始末をしていました。右手に指輪をしてはいけない、と身にしみて覚えたのも此の時です。

国際の舞台裏

パーティは「会議の大切な準備であり、成果を確める場でもある」と実感する場でもありました。

会議の前後などには緊張感が感じられました。彼が帰宅した時、「すぐ食事? シャワー?」と尋ねただけで「だまっけてくれ! 一日中何人と口をきいているか分かるか!!」と怒鳴られ、疲れきった顔を見て何も言わずにコートを受け取るだけのこともありました。

言語、習慣、宗教、それに培われた道徳感なども世界中の人たちと関わることの難しさであろうと思います。嫌な思い出として残るのは、ミラノ कांग्रेस 最終日、成果を喜び疲労困憊の彼はやっと熟睡しました。が翌朝、地下室の一隅に積んであった頂き物、つまり各国代表の方々からのプレゼントの山、全部がすっかり消え失せていたのです。それに気づいた彼は「むうう・・・」と唸りました。これが国連が誇る「犯罪防止世界会議の成功」! ? という悔しさだったことでしょうか。あの打ちのめされたような悲痛な声と姿も忘れることはできません。後日の各国へのお礼状には何と記したのでしょうか? 誰の責任だったのでしょうか。まず日本では考えられない事件でした。



「こんなに沢山ある教会で、牧師に告白すれば又、新しく盗めるのかなあ」と苦し

そうに呟いた彼の姿も疲れきっていました。一般の日本人の奥底にある「おてんとうさまに恥ずかしくないように」という気持ちは本当に尊い倫理感ですね。でも世界中の人が持っていると思うのは、残念ながら間違いなのでしょう。



IAP ロゴ

司法制度も少しずつ、それぞれの国の機関、国民性などによって異なるのは、世界共通の制度が勿論ある上に根本的な善悪意識が異なるからでしょうか。皆様よくご存知でしょうし私などの素人の論ずることではありません。しかし、カルロス・ゴーン事件も口惜しいですね。法と法の隙間をつかれたか、解釈をまげて主張されたか嫌な事件ですね。IAP（国際検察官協会）の副会長でもあった稔が存命・現役であったらば、どうしたか、と考えてもみます。この会の集まり、(会議)でもアジアの国々を代表するつもりだったかも知れません。アジ研の旧友ともよく話していたようでした。今では「日本という文明国のしっかりとした制度や立場を堂々と説明し主張できる能力を持つ現役・若い法律家・検事も多数おられるでしょうに」と思わずにはられません。日本国内だけで叫んでも通じない「善悪の基準」が働いているのではないのでしょうか。是非、日本の正義を通して下さるよう願っています。

命は長いようで短いです。生きる価値は何でしょうか。今しなければならぬことは、今すぐにやらないと流されて消えます。時間の流れは速く、人の一生は限られていますから。私たち日本人の殆どは、読み書きが出来、善悪を弁え、労働を美德として育っています。美しく豊かな海と山野に培われた文化も誇りです。この幸せを次世代につなげ、更に発展させて貰いましょう。

「生涯、最後のパーティ」

米寿に至るまで働けていたら、「犯罪なき繁栄」にもう少し近づけていたかもしれないが、残念なことに 80 歳に近づく頃には、さすがの彼も力尽きてこの住いで休むことが多くなりました。元気な頃の敷田を皆様よくご存知のことと思いますので退場後の日々について記させて下さいませ。

「お帰りデコちゃん、待ってたよ」と玄関の灯りの下に、きちんと揃えたスリッパと満面の笑顔で私を迎えてくれた日々……。眠っている様子に、声をかけずにいると、目覚めた彼は「待っていたのに挨拶しないのか」と本気で怒りました。こんなに可愛い「敷田稔」という人物を皆様は想像お出来になりますか？ 勿論、最晩年、ここでの暮らした日々のことですが。夕焼空、富士山と海、江ノ島、東側に遠く見える三浦半島などに感激して、私を窓側に呼び寄せるのも度々でした。ここに至るまでの彼の生涯は戦いの日々で、側にも辛い時も多かったので、短い間ですが、今思うと尊い位に楽しい時間でした。今は夕焼けや早朝ピンクに輝く富士山に彼の写真を向けて「どこで見ているの？」と話しかけています。

いよいよ最後のパーティ

亡くなった年（2017年）の1月末、千田アジ研所長の率いる、エドワード・ベテーレ氏一行を我家にお迎えしたのが公の最後の会でした。最高検の若い検事2人も同席する8人を、在生中の稔、私と長女でお迎えしました。外国人5人が主客とて、英語で話すことが多かったのです。おすしに茶わんむしなどと日本酒だったと記憶しています。なつかしい方々との再会を喜び明るい外の景色も加わり、賑やかな会になりました。彼も勿論、活発ではありませんが会話に入って楽しそうにしていたのですが、今考えると、大変に努力していたでしょう。よく聞こえていなかった筈ですから。でも、終始楽しげにして、お見送りまで笑顔でした。

その後、2月の彼の誕生祝は家族との最後のなごやかな集いとなりました。そして・・・

本当に最後の客となったのが私の甥夫妻二組です。7月1日でした。特級酒を一本、「おじ様のお見舞い」として。何でも洞爺湖サミットで供された「静岡磯自慢」という特級酒でした。



最後の写真（2017.7.1）

おいしそうに少しずつ、お酒を味わい、相手にすすめて。おすしも少しずつ、口にしていました。終りの頃には、彼の愛唱歌「蒙古放浪歌」を3回も切々とかつ朗々と唱いました。本当に精一杯、感情を込めて、なぜか甥たちに「頼むよ」と言っておりました。そして玄関で「元気でな。またね」と別れを惜しみ挨拶を交わしました。が、私が階下まで彼らを見送って戻った時には、もうベッドに入っておりました。

それからは、一滴の酒をも口にすることはありませんでした。「一生分のお酒をこれで飲みつ尽くした、うまかったよ」ということでしょうか、お見事！と称えたい程。

ふり返れば、まだまだ話は尽きませんが、この三回の会は彼の生涯を締めくくるに相応しいパーティでした。今朝も晴れて、うっすらと頭に雪をかぶった富士山と相模湾に浮かぶ漁船が白く輝いているので稔の写真を胸にベランダに出て、たっぷり見せました。

コロナ騒ぎは世界中に拡がり不安な日々です。皆様どうぞ「お天道様が見ている。悪いようにはならない」と信じて一日一日を大切にお過ごし下さいませ。

私も命ある限り、この世で稔の悲願であったこの財団の成長と更なる活躍・発展に出来る限りに尽力し、向こうに行った時、「デコ、マッテタヨ」と笑顔で迎えてもらえるように生きようと願っております。



UN仲間と共に



稔最後の誕生日祝

追記

思い出に登場された方々の中からも何人もの方々の訃報が届いて参りました。皆様いろいろと検察庁、UNAFEI、ACPF、又はさまざまな敷田の活動にご協力下さり、ありがとうございました。厚くお礼を申し上げますと共に、心からご冥福をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

来たる三月には「コンGRES」開催予定ではありますが、たとえ「コロナ」の影響で開催に至らなくても、犯罪防止の努力は続けていきたいと思います。稔もどこかで必ず見守っています。